



地域おこし協力隊ものづくり部  
自分らしく生きる



平成27年3月、惜しまれながら閉校した大口南中学校。生徒たちの思い出が詰まった学び舎跡を、地域おこし協力隊ものづくり部の金山さん、清永さん、佐野さんがアトリエとして活用しています。人とモノが溢れる都会ではなく、伊佐で暮らすことを選んだ20代の3人共通するのは、「作品を作り続けたい」という純粋な思い。

協力隊として伊佐の特産品開発と工芸体験の機会を提供しながら、作品制作に没頭する若手作家にお話しを伺いました。

# 伊佐

担い手不足を解消したい

地域活性化や集落の機能維持のために、若者に移住して来てほしい。多様な人材を受け入れ、地域資源の活用や特産品開発にも繋げたい！

# マッチング



# 若者

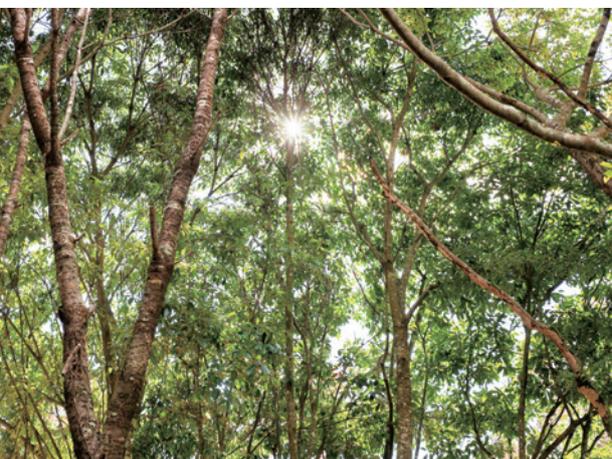
創作活動を続けたい

美大を卒業したばかりの若手作家が創作だけで生計を立てることは、ハードルが高い…。

## 若い力に期待

地域おこし協力隊（以下、協力隊）は、人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に受け入れ、地域協力活動を行ってもらい、その定住・定着を図ることで、意欲ある都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化を図っていくことを目的とした制度です。

現在、市では20代・30代の8人の隊員が、工芸ものづくり・移住定住支援・文化振興・高校魅力化など多岐にわたる分野で活動中。前職も出身地もばらばらの個性あふれる若者たちが、伊佐市に新たな風を吹き込んでいます。



やるならいましかない！

私は美大で漆工芸について学びました。4年次になり、就活もうまくいって大手企業から内定をいただいていた。あとは卒業に必要な単位を取るだけという状況で、「俺はまだ燃え尽きてない」という思いがこみ上げてきたんです。

作家を続ける方法を探っていたとき、求人サイトで協力隊募集を知り、「これしかない」と応募を決めました。

## 見つけた新たな居場所

なんとなくですけど、誰も自分のことを知らない土地で挑戦したいなと思っていました。3年前は大阪と沖縄を拠点に活動しており、九州は来たことがなかったですから、そういう意味でも伊佐に魅力を感じたんです。

これまでに協力隊として、食器や箸などの漆工芸品を作ったり、市民ワークショップを開催したりしました。作品に使用しているヒノキやイヌマキは、市内の神社や個人からいただくことも多く、とてもありがたいです。知り合いも増え、おかげさまで充実した生活を送っています。最近、ふるさと

納税の返礼品  
開発や明光学  
園で美術の授  
業にも取り組  
んでいます。

協力隊の任期も残り4か月。やり残しがないように全力で活動します。

# 漆木工

俺はまだ燃え尽きてない！

## 金山智則さん

1995年生まれ、大阪府出身。沖縄県立芸術大学デザイン工芸学科卒。平成31年4月着任。漆器や“ナンコ棒”などを制作中。自称・THE関西人らしい明るい性格なので「気軽に声をかけてくださいね〜」



# 草木染



## 清永啓太さん

1995年生まれ、熊本県出身。沖縄県立芸術大学デザイン工芸学科卒。令和2年7月着任。自然由来の染料にこだわった草木染ワークショップを開催。広報いさにイラストを掲載中。

### 転職のタイミングで

私は美大卒業後に陶芸工房に就職し、沖縄で陶器の絵付けの仕事をしていました。入社から2年が経ち、そろそろ地元の本に戻ろうかなと考えていました。そんな時に、大学時代の友人でもある金山くんを通じて、協力隊募集を知りました。会社を辞めても、ものづくりは続けたいと思っていたので、自分の

## 自然に囲まれた環境が、私の性分に合っているんです

作品で地域活性化ができるミッションにやりがいを感じました。

### 自然の豊かさを感じる暮らし

伊佐は自然に囲まれてとても生活しやすいです。都会の暮らしより、自分の性格に合っているんだと思います。

着任して、1年5か月。実は、協力隊としてどんな活動をするか悩んでいた時期もありました。最近は草木染めに挑戦し、ようやく活動の広がりを実感できるようになりました。11月14日には、十曾でワークショップを開催して、身近な植物が鮮やかな黄色やオレンジ色の染料になることをみなさんにご紹介することができました。今後も楽しみながら、交流の場を増やしていければと思います。

### 東京を出る決意

今年3月に美大を卒業して、そのまま協力隊として移住して来ました。卒業後も創作活動を続けたいなあと考えていたとき、

たまたま求人サイトで協力隊募集を見つけたのが移住のきっかけです。作家としての幅を広げるためにも、一度東京を出たいという気持ちもありました。

美大では土器をつくっていたので、自分でその土地の土を採取し、火を焚いて作品を焼き上げる環境に魅力を感じていました。伊佐での生活は理想です(笑)

### 伊佐のモノを作る

センスがいい、才能があると勘違いされそうなんです。努力さえすれば誰でも美大生になれるんですよ。本当にすごいのは「作り続けている人」です。私は、伊佐でしか作れない作品を生み出していきたいです。

先日販売を開始した

「田の神さま」のガチャガチャは、新聞やテレビにも取材していました。

さっそく、伊佐の

PRができたかなというれしく思っています。

また、学生時代に

# 土器

## 東京ではできないことがしたい

### 佐野るりさん

1998年生まれ、東京都出身。武蔵野美術大学工業工芸デザイン学科卒。令和3年5月着任。「田の神さま」ガチャガチャで、メディアから大注目。



陶芸教室でアルバイトをしていたので、教えることは得意です。今後、ワークショップを開催して、土器づくりの魅力も伝えていきたいですね。





# 社会に飛び込め！ 大口高校生の挑戦

「おしゃれを楽しむ機会をつくりたい」と奮闘しているのは、大口高校2年生の仲良しグループ。総合探究授業で、伊佐の地域活性化策としてセレクト古着の青空市を提案。を受け、これまでに忠元公園で古着ファッションイベント「DIVE」を2回開催しました。SNSで情報を発信、BGMや飾付けなど若者が楽しめるおしゃれな空間づくりにも工夫を凝らしています。

11月28日開催予定の第3弾「DIVE&BOOKS」は、「秋」がテーマ。秋冬用古着・焼き芋・アクセサリーの販売などの準備を進めています。11月9日のミーティングを取材すると、イベントに向けて試行錯誤する高校生の姿がありました。アクセサリー制作を担当する福岡さんは「植物や昆虫の模様をデザインに採用するつもりだけど、なかなかうまくいかない」と悩みを相談。各々が不安を感じていることをメンバーと共有し、全員で

解決方法を探りました。「若者が遊べる場所は少ないけれど、自然が豊かで人も優しい。私たちは、そんな伊佐が大好きなんです」と平形さん。友人や親戚からイベントの感想を聞くことが、やりがいと達成感に繋がっているそうです。お手伝いとして参加する内村さん・下小蘭さんは「私たちは市立図書館の活性化に取り組みたいと考えています。DIVEでは絵本の読み聞かせを企画しているの

で、子どもたちが喜んでくれたらうれしい」と話し、多彩なアイデアでイベントを盛り上げようと意気込んでいます。定員割れが続く大口高校ですが、スポーツ競技の成果や大学進学率だけでなく、生徒の「生きる力」を育む教育機会の充実も、注目してほしい魅力のひとつ。若い世代が輝けるまちづくりに向けて、主体的なチャレンジを続ける高校生の活動を応援していきたい。



▼イベントに関する Instagram アカウント @dive\_isa\_kagoshima

▼写真左から：内村莉奈さん、福岡実咲さん、有村裕那さん、平形紗愛さん、下小蘭りんさん  
欠席：福岡来実さん、南蘭愛織さん



あっぱれ! Vol.22  
伊佐感  
イサモリ

DIVE  
USED & VINTAGE CLOTHING